大学出版

7号
'89
春

大学出版部協会

Association
of
Japanese University
Presses

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press

慶應通信
Keio Tsushin Co., Ltd.

産業能率大学出版部
Sanno Institute of Business Administration

玉川大学出版部
Tamagawa University Press

中央大学出版部
Chuo University Press

東海大学出版会
Tokai University Press

東京大学出版会
University of Tokyo Press

東京電機大学出版局
Tokyo Denki University Press

東京農業大学出版会
Tokyo University of Agriculture Press

東京理科大学出版会
Science University of Tokyo Press

法政大学出版局
Hosei University Press

明星大学出版部
Meisei University Press

早稲田大学出版部
Waseda University Press

名古屋大学出版会
The University of Nagoya Press

関西大学出版部
Kansai University Press

九州大学出版会
Kyusyu University Press

大学出版
7号

Spring・1989

大学出版全国講演会――創立二十五周年記念――石井和夫 1
一休の老いと詩（又は死）――柳田聖山 5
日韓大学出版部協会合同セミナーに参加して――小野沢公男 山下正 19
大学出版部ニュース――21
新刊案内'88・10～'89・3――25
第10回（昭和63年度）日本生命財団刊行助成図書――32

大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

本小冊子の表示価格には、消費税は含まれていません。

大学出版全国講演会

——創立二十五周年記念——

石井和夫
（大学出版部協会・前幹事長）

昨秋十月から今年一月にかけて、北海道・東京・九州・東海・近畿と駆け歩いた。大学出版部協会創立二十五周年記念事業の一環をなす全国縦断講演会のためである。二十周年のときと同様、今回も日本生命の協賛を得、本社・支社をあげてのご支援をいただいた。

札幌は北海道大学図書刊行会の主催。イワナおよびサクラマス（ヤマベ）に関する国際研究会議と北海道新聞の協力で、萱野茂・二風谷アイヌ文化資料館長による「神の魚とアイヌ民族」、川那部浩哉・京都大学教授の「川と湖の魚たち」を軸に、北大苫小牧地方演習林長・石城謙吉教授の司会で「北海道の自然と川の魚たち」のパネル討議が行なわれた。川那部教授の豊かな実地調査にもとづく魚と人のまじわり、萱野館長によるアイヌ民族の生活の知恵と祈りの物語がひとつになって、自然への畏敬、環境保全の大切さへの思いが、日生北門館ビルの講堂いっぱいに溢れてみえた。

東京は八王子で、中央大学出版部が担当、八王子市教育委員会と朝日新聞の後援。まず東京経済大学の色川大吉教授が自由民権百年のポスターを背に、明治の初め精神の自由と民主的理想郷建設をめざした千葉卓三郎の五日市憲法草案を紹介、北村透谷をめぐる「多摩の先人たちの夢と今」を説き、それを受けて金原左門・中央大学教授が「世界史のなかの〝いま〟、地域の〝これから〟」を二十一世紀まであと十二年という状況に即して論じた。この会には中央大学の川添利幸学長も出席、地元大学を代表して挨拶されたのが印象的だった。

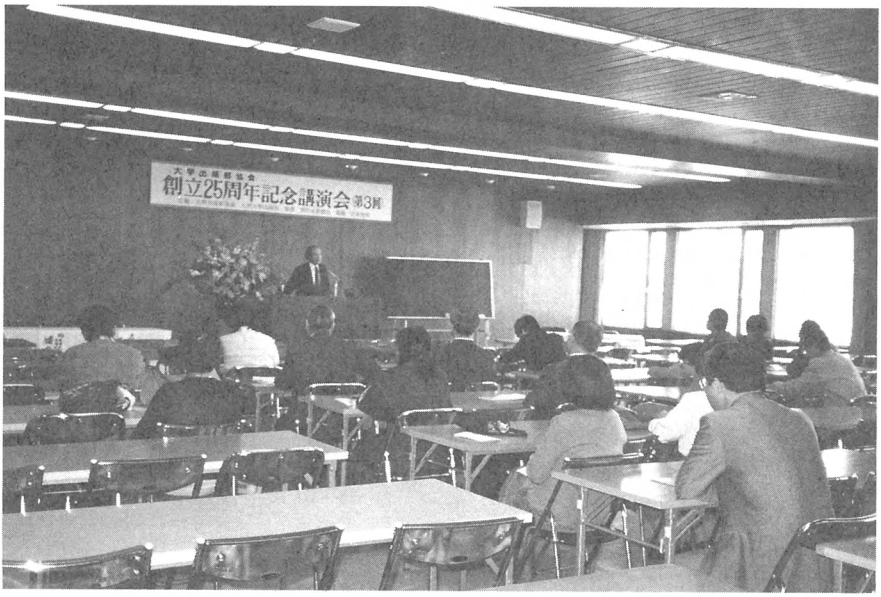
福岡では、沖縄から山口まで二十八の国公私立大学を擁する九州大学出版会が西日本新聞の後援で二つの講演を用意した。久留米大学の越智重明教授による「東洋における民間芸能の交流」は、いかめしい題とは裏腹に、インドから中国、朝鮮半島をへて日本にいたり、さらに還流した多彩なサーカス雑技の伝承をスライドをまじえて興味ふかく解説、幻想的なもう一つのシルクロードを楽しませ、九州女子大学・成瀬悟策副学長の「からだの動きとこころの活性化」は臨床心理学の立場から人間の垂直軸、つまり背筋の伸びと気の持ち方について、催眠術の実演入りで聴衆をひきこんだ。

札幌での第１回記念講演会（1988.10.7）

「名古屋大学出版会は東海地区十七大学の出版センター」と藤瀬浩司理事長が挨拶されたとおり、後援の中日新聞をはじめ地元テレビ・ラジオの肩入れで、名古屋駅前の松岡ビル日本生命ホールは定刻前にほぼ満員の盛況。「医者より坊主が先とはどうも」と、柳田聖山・花園大学禅学研究所長が登壇。一休禅師の遊んだ狂雲すなわち風流の世界を飄々と説かれつつ、辞世の境地に及んでひょいと話をしめくくられた。さながら老・病・死の超脱。つづいて病理学者、飯島宗一・前名古屋大学長が「医者と文学のあいだ」を、カロッサ、チェホフ、茂吉、杢太郎、鷗外等々に即して、テーマとしての病者とのかかわり、その光と影のあやなす「医師の生活」を淡々と語られた。

京都は初めての試み。近畿唯一の会員である関西大学出版部が大学生協京都事業連合と組み、京都新聞の後援を得て、新築早々のコープ・イン・京都（大学生協京都会館）の柿落（こけら）しに挑んだ。テーマは「九〇年代を考える」。はじめに佐和隆光・京都大学教授が「豊かさとは何か」と問いかけ、六〇年代以降顕著になった価値観の変遷をふまえながら、新保守主義化、経済社会のソフト化、ヤマトイズム、ポスト・モダン等々、九〇年代に臨む考察の指標を示され、坂井利之・竜谷大学教授は「高度情報社会の実態を考える」と、人工知能の基本的課題を盛り沢山の例証で説き去り説き来った。聴衆の感想の一つに「刺激的、頭がヴィヴィッドになったよう」と書かれてあったが、まさに

八王子での第２回記念講演会（1988.10.14）



福岡での第３回記念講演会（1988.11.15）

京都での第５回記念講演会（1989.1.27）

ぴったり。

テーマこそ異なれ、会場こそ違え、講師の一言ひとことにうなずき応える読者の顔は一様に光り輝いていた。アンケートによれば、年齢層は十代から七十歳を超える厚みをみせ、三分の一はご婦人、職業は学生・主婦・教授・会社員・自営業とさまざまで、書店の方も何人かおいで下さったのが嬉しい。講義よりずっと面白いという感想は大学出版部としていささか複雑な感慨を禁じえないが、書店さんから敬遠されがちな重厚長大本の大学出版というイメージとは一味ちがうものを見ていただけたようである。生涯学習の今日、大学のエクステンションとしてのわれわれの前途に光なきにあらずの感を深くした。

各会場にはすべて日本生命財団刊行助成図書を展示し、加盟十六大学出版部の図書目録と『協会二十五年の歩み』を配布した。「日本の大学出版の伝統が意外に古いのに驚いた」とか、「京都にも大学出版部がほしい」とか、「出版部の方が大学を超えている」といった声が聞かれたのも有難かった。即売ができたら、もっとよかったろう。

講演会を終るに当り、創立二十五周年に当ってお励しを賜わった関係各位、ご多忙中にもかかわらず講師をお引受け下さった諸先生、そして御参会の皆さん、各地主催出版部のご苦労とご尽力、さらにご後援、ご協賛を賜わった皆様のご芳情に対し、あらためて心からの謝意を表して、ささやかな報告を結びたい。（一九八九年二月十七日）

一休の老いと詩（又は死）

柳田聖山
（花園大学国際禅学研究所長）

私の話は、一休の詩でございます。坊主が先というのは、ちょっと縁起が悪いかもしれませんが、あとでお医者がご相談申し上げます。日本生命、生命保険というのは、どちらに関係があるのでございましょうか。今晩はそんなところから、前座をつとめさせていただきます。

一休というと、日本の坊さんの中では、一番よく知られていて、弘法大師も親鸞上人も道元禅師も、立派な祖師方でございますが、気の毒なことには、宗門の開山堂に祭りこまれてしまって、なかなか地声で話ができないわけでございます。一休さんは、いつも町の中でしゃれこうべをぶら下げて「門松は冥土の旅の一里塚、悲しくもあり嬉しくもあり」とお正月になると必ずでてくるわけでございます。特に最近のように、お坊さんの値打ちがだんだん下がってまいりますと、一休の株が上がるわけでございます。近ごろでは、各宗門ともに内紛が起こって、坊主くらい喧嘩好きの集団はないということになっております。昔から叡山の坊主というのは、喧嘩の総大将でありましたから、今の坊さんだけが悪いわけではありませんが、現代の坊さんを見ておりますと、何か教団仏教というものに、愛想をつかすことになるわけでございます。

弘法大師にしても、親鸞上人にしても、今のお坊さんたちの、そんな尻拭いをしなければならないわけですが、一休さんという人は初めから町の中に出ております。つまり奥の院がないわけです。そういう点では、本当に恵まれていました。日本のお坊さんで、一人で国際行脚のできる人は、それほどあるわけじゃない。それで外国にも、一休への感心が高まっております。先ほども会場の入口に、カナダのソーニアさんが翻訳をした、一休の歌の英訳が並んでいました。ご覧になってない方は、帰りにちょっと手にとっていただければと思います。これは東大出版会のお仕事で、上出来の一つでございます。

一休という人は、そういう点では始めから、八方破れでございまして、堕落といえば、破戒無残、これくらい地獄のど

名古屋での第４回記念講演会（1988.11.25）

ん底に、丸腰すえている坊さんというのも、一寸珍らしい。地獄一定と言った、親鸞上人も顔負けでございます。

一休は八十八歳、親鸞は九十歳まで生きます。この長い一生涯を、一休は自由奔放に生き抜いた、禅のお坊さんのお一人でございます。先ず、一般には頓智一休ということで、子供の仲間と見られるようです。特にこの若い時代の一休の頓智は、いつも人気がありまして、一休というと頓智ということになるのです。たとえば、和尚さまの下で修行をしていた時に、この和尚さまが壺の中に水飴を大事にしていたのですが、これを一休には舐めさせません、これを舐めると中毒して死ぬぞと、子供が舐めてはいかんというのです。それで、和尚がいない間に、一休は舐めたいだけ舐めて、ついでにその壺を庭に叩き割って、和尚が帰ってきて「なんだ」と言う。「お掃除をしようとしたら、壺が落ちて割れてしまった。和尚様の大事にしていた壺が割れたので、もう死のうと思って水飴を舐めましたが、いっこうに死ねません」。こういう頓智というのは、一休の十八番であります。「この橋渡るべからず」というと「真ん中を渡ってきた」というのも、その一つ。

あるいは又、この頓智というものが発展いたしますと、回国一休と言いますか、諸国を巡って、悪を懲らしめ善を助けるという、つまり水戸黄門の前身のような話があるわ

けです。特に、この『関東一休』という草子ものが、江戸時代には出てまいります。これは、私は水戸黄門の諸国漫遊の種本に、どうも『関東一休』が使われているのではないかと思います。一休は今から六百年も昔の人で、江戸はまだ野原であったはずなのに、この草子の中では一休さんは江戸に行って諸国大名に出会ったり、強欲な御用商人を懲らしめたり、お家騒動に立ち入ったりするわけでございます。

時代を自由に引っ繰り返して、話を展開するおもしろさです。一休ばなしを主人公にすれば、どんな話でも「まあそうか」と、誰にも思わせるようなところがあるわけです。一休くらい正体のわからない、歴史的人物も少ないのです。「一休の正体みたり枯れ尾花」というくらいに、一休の正体はわからないにもかかわらず、一休への関心というものが今や国際的に広がっていっておりますし、各宗派の抗争の絶えない日本で、これくらい人気の高いお坊さんも、珍らしいだろうと思うわけでございます。

この一休、八十八歳の長い生涯でありますのに、若い時分の頓智というものが、それほど子供に人気がある。漫画とか童話というものは、子供だけのものではないわけですが、だいたい子供のアイドルとしての一休が、頓智というものに代表されるといたしますと、いわゆる諸国漫遊一休というのは、中年期の読者の、ひとつの社会倫理を受け持つわけです。

一休の時代にはまだ江戸はないはずなのですが、『関東一休』にはちゃんと江戸が登場しまして、一休が江戸につきますと、京都から名僧がお出でになったというので、さる大名の奥方がご馳走を持って、供養のサービスにうかがいます。一休はお酒に酔っぱらって、喜んで「今晩はここに泊っていけ」と言う。奥方はびっくりして逃げ帰って、ご主人につげます。ご主人は「お前はなぜ、泊まってこなかったのだ。一休ともあろう高僧が、泊っていけといったなら、これくらい名誉なことはないではないか」と言います。奥方が思い返して引き返しますと、一休はもう横になっておりまして、「俺は知らん」と言う。こういう話はかなり高級でありまして、子供には分かりにくいわけですが、回国後のテーマといたしましてはたいへん面白い。

それから叡山にのぼると、叡山の悪党どもが一休をこらしめてやろうと思い、「この世の中で一番長い字を書いてほしい」と言いました。「よしきた。墨と紙を持ってこい」ということで、紙を長々とつないで根本中堂から坂本まで紙をつながせて、墨を筆に含ませて一休が山の上から下まで一気に駆け下りた。そして、坂本で筆をちょっと回しますと、これが平仮名の「し」という字になりました。これ

が世界で一番長い墨跡ということになるのですが、この「し」というのは、私が今日申し上げようとする、「死ぬ」という「死」ということであると同時に、歌という「詩」でもあるわけでございます。

ここまで申し上げますと、今日はこれでお暇してもいいくらいなのですが、そういう長い「し」をモチーフにするところに、私は一休のおもしろさというもの、いわば本領というのがあるのだと思います。つまり、一休は詩（死）の問題を生涯の課題としながら、これをいろいろな階層世代の人々に訴え続けるのです。八十八年の生涯というのは、ようするにそんな詩の宣伝、死の解明というものになりはしないでしょうか。

近年、一休の晩年といいますか、七十歳前後から入滅までの間を、もう一度しっかりと見直してみようという動きがございます。いわば、頓智一休や諸国物語一休ではなくて、一休の正体というものは、わからないにしても、ご本人が残した漢詩と墨跡がたくさんある。一休くらい自筆、他筆の紛らわしい墨跡は、ちょっとめずらしいのではないか。数年前、中川一政先生と共同で、『一休宗順墨跡集』というものをつくりましたら、四百点くらいでてきました。このうち中川先生が、七、八十点をお持ちになっているのですけれども、どうも他筆の墨跡がたいへん混ざっているようです。その他筆の墨跡というのは、現在も続々と生産されているわけです。滅後六百年、まだ生産を続けている作家というのは、これは化け物といえば化け物ですが、高僧の高僧たる所以でございます。つまり、今も生き続ける。現在も生き続けて、話をつくり、詩を作り、書を書き続けている。こういう一休のいわば生きざま、「し」にざまというものを、特に晩年に焦点をあてながら、少し私の見方をお聞きいただけたらというのが、今日の主題でございます。

一休の漢詩を読むには、どうしても漢字に付き合っていただかなければなりません。漢文は今、我々の社会からだんだん外れていっています。こういうものの再評価は、やはり大学出版部協会の仕事でございまして、漢文は日本民族の文化遺産の中に、大きな力を含んでいるわけでございます。漢詩を抜きに、一休の話はできない。今晩お越しいただいた方の中には、かなり年配の方もいらっしゃいますが、昔の中学時代にちょっとお戻りいただいて、漢文にお付き合いいただければと思います。若い方は「へえー、漢文とはそんなものか」と思っていただけたら嬉しいのですが。そのために、黒板に書いていく時間が惜しいので、コピーを作っておきました。裏表一枚ございます。

一休の辞世というのがあります。一休が死ぬ時、我々に

残していった歌でございます。テキストコピーの2の方、つまり裏の方の上の中央にございます。辞世というものは、中国から日本に伝わってまいりました禅仏教というものの、ひとつの大きい功績といいますか、貢献のひとつでございます。つまり辞世の詩を作るということが、禅の禅たる所以だと思います。最明寺入道時頼は、有名な「業鏡を高く懸けて三十六年、一槌に撃砕して、大道坦然」と詠みました。漢文とはだいたいこういうものですが、とにかくこんな詩をつくった。これが実はにせもので、他人からの借り物、つまり盗作です。死ぬ時まで、盗作をするというのもどうかと思いますが、日本で禅を勉強すれば、漢詩で最後の辞世を書かなければならない。中国から禅が入って、鎌倉時代のお坊さんも、それから将軍様も大変だったわけです。やはりカンニングをしたわけでしょう。時頼の辞世は『吾妻鏡』に載っておりますので、『吾妻鏡』の編者の盗作なのか、時頼が自分で盗んだのか。実はこれは、「業鏡を高く懸けて三十六年」というかわりに、「業鏡を高く懸けて七十三年」という作品が、その時代から十年ばかり古い、中国の禅文献に出てくるわけです。

こういうふうに辞世というものは、当初は日本人にとってかなり難しいものであった。そこに無理がございます。『徒然草』の兼好法師などは、「禅僧が辞世を書くのは、実につまらないことだ。死ぬ時くらいもう少しまじめに、盗作をやらずに黙って死んだ方がいいではないか。最後まで借り物はいかん」と言った。新井白石も本居宣長も辞世を非難します。しかし芭蕉の「塚も動け」ですとか、正岡子規は三十六歳で亡くなりますが、最後に『病牀六尺』という連載ものを新聞に書いて、「へちま咲いて、たんのつまりし仏かな」という、最後の句を作りました。いかにも子規らしい最後でございまして、死ぬまでへちまを見て暮らした、あの三十六歳の短かい一生の間に、あれだけの大きい仕事をした人の、最後の心境というものが、見事にまとめあげられているわけでございます。

辞世というものは俳句であろうと和歌であろうと、日本人が作るということは、こういうことでありました。「形見とて　なにか残さん　春は花　夏ほととぎす　秋はもみじは」、これは良寛の辞世です。それから「裏を見せ表を見せて散る紅葉」これも同じ良寛です。実はこれにも問題があります。今日は残念ですが、良寛のことはやりません。とにかく辞世というものが、日本人に定着してきたということは、たいへん大きな収穫であるわけです。はじめは漢詩でやっていたのですが、だんだん俳句とか和歌とか、あるいは短い単言寸句で、何かやはり死ぬ時は一言あった方がいいのです。にせものではなく、自分の言葉で「ありが

とうございました」「すみませんでした」といってもいいのです。その最後の一言というのは、やはり大切なものだと思います。そういう仕種というものを、禅仏教は日本人に、教えたわけでございます。

五山文学の時代、今から六百年ほど昔の、室町の中期と言えば、まさに京都に五つの国立大学があったわけです。一休はその当時は国立ではなくて、むしろ私立大学と考えていい、大徳寺のお坊さんの小僧になりました。はじめは国立大学の建仁寺で、小僧の勉強をするわけですが、大徳寺はその当時は私立でございました。あまり格のあがらないお寺でした。一休はこういう時代の、いわば五山の谷間に花開く、一人の大型詩人であるわけです。当時は漢詩を作るということが、お坊さんの絶対的な条件でございました。室町時代というのは、平安文化の再編の時代ですが、平安朝のお坊さんたちはみな仏師です。仏像をかいたり、彫ったり、そんな仏教美術の制作ができないようなお坊さんは、天台、真言のお坊さんとは言えない時代が平安時代ですが、鎌倉・室町になると、漢詩が作れないと、禅僧にはなれない。それでにせものもあり、盗作もあるけれども、やはりみなさん一生懸命、漢詩の勉強をするわけです。

一休は十三歳から、『三体詩』という漢詩のテキストを勉強します。『三体詩』というのは、唐代の詩の選集でございまして、四百七十何種かの詩が集められております。ちょうど、『唐詩選』の前身になるのです。この時代、『唐詩選』はまだないのです。そんな『三体詩』を、一休は十三歳で勉強します。そして、漢詩というものが、一休の生涯の土台になっていくわけです。

一休の正体はわかりにくいけれども、この漢詩というものを、もう一度細かく読み直してみますと、おおよその実像に近づいていくことができるわけです。私も縁があって、一休の漢詩の研究をすこしばかりやっております。当時の中国仏教との関わりということを、漢詩でおさえてまいりますと、この『三体詩』と一休というものは、大変興味深いものです。『三体詩』は『唐詩選』に比べますと、かなり色っぽい。一休の色っぽさというのは、十三歳から始まるわけです。十三歳の少年、しかも父なし児の利発なる少年が、そして一休が後小松天皇の御落胤であったかどうかも問題なのですが、『三体詩』にぶつかった。父なし児で育つ一休が、御落胤と言われる出所も、じつは『三体詩』にあるわけです。つまり、一休は自分で落胤だと言いだしたのではないか、そう言い出したキッカケが、『三体詩』にあるわけです。それほど、『三体詩』全体の傾向というものは、非常に政治的で、色っぽいもので、十三歳の子供が色歌を覚え、これが八十八歳まで続いたわけでございます。

三つ子の魂百までです。そして、自作、他作の漢詩と墨跡が、これにさらに輪をかけて広がっていく。こういうだいたいの筋道を、今は確認できるわけです。

そこで、コピーの裏面の上の真中に辞世を出しておきましたから、まずそれを読んでみます。「十年花下、芳盟を理む、一段の風流無限の情、別れを惜む枕上、児女の膝、夜は深し雲雨、三生を約す」。こういう七言絶句でございます。七字の四行詩を七言絶句といいます。『三体詩』というのは七言絶句、七字の四行詩が、その一番初めにございます。それから、七律というのがあります。律は八行詩で、フランスなどの近代詩に似ている、と言ってもいいわけでありましょうが、その倍くらいの長さです。さらに長いものもあります。その七言四行の次に、七言の八行詩があるわけです。それから五言の八行詩があります。つまり、七言の四行詩と七字の八行詩と、五字の八行詩、こういう三つのスタイルの詩を集めたから、『三体詩』というのです。

とにかく、十三歳でこの『三体詩』にぶつかった一休は、その本の一番最初の七言絶句、七字四字の詩のところだけを、どうも熱心に勉強したようです。これだけものにしておけば、一生テーマにこと欠かないわけです。そうして八十八歳で亡くなるまで、この七言絶句を作り続けるわけです。

古来、漢詩を作る作家は、日本にも沢山いるわけですが、いろいろなスタイルの詩を作っています。良寛も詩人ですが、いろいろなスタイルの詩を作ります。七言絶句のみを死ぬまで作ったのは、一休だけなのです。この辺にも一休の一休たる処がありますし、自作、他作が混乱してくる原因にもなると思うのです。

「十年花下芳盟を理む　一段の風流無限の情」と、死に際に言い切る一休です。「十年間、お前と楽しい約束をとりつけてきた」と言う。この「理」というのは、管理とか理事とかいうように、何かそういうものをとり仕切ることです。

もうひとつ、一休には別の辞世があります。これが「須弥南畔、誰か我が禅を会する、虚堂来也、半銭に直らず」。これは一休の自筆が残っています。親筆ですよ。特に「南」という文字を書き落として、後から横に書き足した。ところが、これをちゃんと書いたのが、別にもうひとつございます。どちらが本物かということになりますが、今はどちらも本物とのことです。「須弥南畔、誰か我が禅を会する、虚堂来也、半銭に直らず。東海の純一休」と、こういうふうに署名があります。ところが、先の七絶の詩の方は、署名も親筆も何も残っていません。明治時代に徳富蘇峰さんが出した詩集に、初めて登場してくるわけで

す。おかしいと言えばおかしいわけですけれども、しかしよくできている。そして、いかにも一休の死に際の作品らしいのです。その理由のひとつとして、今は「理」という字を、私は問題にしているわけですが、「須弥南畔、誰か我が禅を会する」という「会」という字、これは理解の「解」でもよい、普通現代日本語で、理解というと「理」という字と解釈の「解」、解くという字を書くわけですが、禅語としての理会は、この会という字を書くのです。そしてその理会ということは、もちろんよく分かるという、了解ということとともに、何かそれに気をつけて、管理するというか、それをしっかりつかむという、もう少し広い意味があります。つまり理解よりもう少し、はばの広い日本語のかまう、かまいつけるという意、反対にいうと、かもうてくれるなといいますが、だいたいこのかまうというのが、中国で理会という、普通の口語の意味ですが、そんな気分がございます。

それで「十年花下、芳盟を理む」という理と、「須弥南畔、誰か我が禅を会する」というこの「会」は、つまり理会という言葉を二つに割っているわけです。親筆のものが本物で、こちらの方が怪しければ、こちらがあわせたのですが、実によくできているわけです。芳盟というのは、あら楽しい、嬉しい、「盟」は約束のことで、夫婦の契りであります。そして、「一段の風流、無限の情」。このひとまとまりの、切ってもきれん喜び、この風流という言葉くらい、一休が好んだ漢字は他にありません。風の動きが流れですから、風が雲を動かして雨を降らせます。雲雨は、男女の情事のことです。一休の漢詩集に『狂雲集』というのがあります。狂い雲というのが、題目になるわけですが、この『狂雲集』という詩集には、現在一番大きいテキストでは、千六十首くらい載っています。ほとんど七言絶句ですが、これがだいたい三万字くらいあるわけです。この中で「風」という文字が、四百五十回出てきます。そして「風流」という字が、百五十回出てまいります。風雅とか風韻とか風狂とか。この狂うという言葉が、一休には一番ふさわしい言葉で、そしてこの「狂う」という言葉は、いわゆる精神病理の問題ではなくて、文学の課題であり、宗教の課題であるわけです。狂雲の狂も、そのひとつであります。

中国の文学の長い歴史の中では、狂というのは好い意味を、肯定的な意味を持っているわけです。五山の谷間に花開いた、色っぽい大輪の美しさの、その理由を狂という、狂雲という言葉に見つけ出したところに一休の文学としての秘密があるのです。そして、この狂雲を言い換えたのが、風流であります。何かが動く。要するに風が広がって

いくだけで、正体がない。まさに一休の世界です。この風流という表現は、先ほども申しましたように、色っぽいところがあります。一休の場合には、むしろ色っぽい方のが、風流です。風雅というと、何か上品な感じがあります。それから、風狂というと、異常な感じがあります。それらがすべて関わりを持ちながら、それぞれに相手を感じる、その気分の違いです。今は二人が堅く約束する風流こそ、そこに無限の感情、ひとことで言い尽くせない秘密があるのです。

「別れを惜む枕上、児女の膝」。美しい若い娘の膝枕をかりて、あの世に旅立ってゆくのは、男冥利に尽きると言っていい。男ならこういう死に方をしたい。女ならこういう死なせ方をしたい。そういう美人の膝をかりて、あの世に旅立っていく状況というものが、「別れを惜む枕上、児女の膝」であり、「夜は深し雲雨、三生を約す」。この「三生」は、三度生まれ変わって、夫婦になろうねということです。実は今が二度目でありまして、前世の契りによって今また二人は会った。これをもう一度、という気分が「三生」です。ひとつずつ長い、そしてややこしい、中国の故事がありますが、今日はそれをいう余裕がありません。「雲雨」というのだけ申しあげますと、これは『楚辞』という古い文学の本に、楚の襄王が野遊びをいたしまして、野宿をした一夜、契りを結ぶ神女との約束が、「雲雨」なんです。これは、夢物語に過ぎないわけですが、『楚辞』の大きなテーマの一つです。枕も出てくるし、女神の膝もある。「雲雨」というのは、旦には朝雲となり、夕には夜の雨、これは男女の愛情を言うわけで、中国文学史の約束であります。こういう話を十三歳から勉強してきた、そういう成果がこの辞世の詩になる。三生の方もいろいろありますが、要するに若い美人の膝を枕に、あの世に旅立っていく八十八歳の老人の最期が、見事に描きあげられているわけです。

もう一つ、となりに出しておきましたのは、「森女」という女性、発音は同じでも、女神の方は、中国の『楚辞』に出典があり、「森女」の方は一休の創作であります。森女の非実在を私が言いますと、作家たちは躍起になって反論しますが、この人はつまり、小説の中の主人公であります。その「森女」との恋物語が、一休の晩年十年のテーマになっていく。本人が言っているのだから、これくらい確かなことがないと言えると同時に、本人だけが言っているのだから他に証拠はないのです。それらしい証拠はいろいろ出ていますが、どうも二次、三次の証拠でありまして、この森女非実在説を、私はまだ撤回しないのです。そんな森女に捧げる歌が、この「白髪の残僧八十年、吟じ望む、夜々碧雲の天。多情の鴛被前債を償なう、弾指して三生、

後縁を約す」。この「約」は約束のやくであると同時に、禅語では「羽交い締めにする」ことです。抱き合うことです。抱き合って、誓いを交わす、そういう感じが、この「約す」という字にございます。この「白髪の残僧八十年、吟じ望む、夜々碧雲の天」。これもまた、中国の李商隠という人の、『嫦娥』という作品を踏まえています。

これは『嫦娥』が、ご主人に内緒で薬を飲んで、身が軽くなって、お月さまに登ってしまう。それで、主人の方が地団太踏んで、地上から月を呼ぶ。こういう物語が「吟じ望む夜々碧雲の天」という、李商隠の作品のテーマです。先ほど申し上げた、『三体詩』の中の一首です。

ちょっとご紹介申し上げただけでも、すぐにご了解いただけると思いますが、漢詩というものは、詮索をしていけば大変にややこしい。せっかくおもしろい詩を、いちいち詮索していって、解きほぐしていきますと、少しもおもしろくないわけです。学者の仕事というのは、せっかくの綺麗な景色を、巻尺でもって測量をしたり、写真をとったり、地面を掘り返えしたり、けっきょくは、実体を痩せさせてしまうわけですけれども、漢詩、漢文の鑑賞という場合も、そういうきらいがいくらかございます。しかし、作者ご本人が、中国の有名な故事来歴のある言葉を使い、その出典を踏まえて作っている以上は、本人の文脈をたどっていくことが、私は大切だと思います。

そういうことでは、この七言絶句はわずか七字四行ですけれども、たとえ一時間、二時間お話をしても、根が「し」の話ですから、長い長い物語になってしまう。一休の辞世というものが、こういう形になっているということだけ、ちょっとここでご了解いただけたらと思うわけです。そして「須弥南畔」以下にあたるのが、むしろ禅僧一休の辞世ですが、これくらいまた凄まじいものはない。とくに文字を見ていただければわかりますように、死に際の筆跡として、これは実に見事でございます。そして「須弥南畔」は、この当時としては、仏教の世界観であり、宇宙大のスケールをもっている、そして最後に、東海の純一休、日本の一休、という名乗りをあげる。第三句の「虚堂」というのは、中国の宋代から日本に入ってきます、その禅宗の最後の祖師が「虚堂」です。そんな「虚堂」を相手どって、東海の純一休が宇宙大のスケールで、自分の辞世をまとめあげる、凄まじい作品と言えます。

つまり、そんな禅僧としての、本格的な作品に対して、いわば軟派文学作家としての一休の、もう一つの辞世があるわけです。その軟派文学の方を、生の実像とするところに、近代の一休がいるわけです。私が先ほどから申し上げている晩年の一休は、むしろそんな色ごとを文学の中で楽

しんでいる。一休の楽しみというものは、あまり生の方へもっていかないで、文学者としての作品確認という方向へ掘り下げていくのが、一休の大きさをもっと大きくしていくのではないかと、私は機会あるごとに申し上げています。この二つの辞世も、そういう意味に解したいと思うのです。

一方は文学者としての辞世であり、他方は禅僧としての辞世です。自筆、他筆をしばらくおけば、両方が深い関わりを持っています。こういう一休像というものは、実は私の仮初ではなくして、七十歳頃から八十八歳で亡くなる、晩年の一休ご本人が、自ら仕掛けた仕事であった。文学者としての一休、禅僧としての一休が、晩年に何を考えていたか、ということをおさえてまいりますと、ほぼこの二つの辞世に行き着くわけです。

その証拠は少しややこしいのですが、今日用意をしてきたコピーでございます。表の方へ戻っていただきますと、こういうざんぎり頭の、これもまた名僧、高僧のイメージとはちょっと違う、いかにも『狂雲集』の作者らしい文学者一休がいます。これは生前に弟子が実際に描いたものと見られており、ご本人もお気に入りだったようであります。一休が亡くなりまして、大徳寺に真珠庵という、弟子たちがお墓守りする寺ができますが、ここには一休が自分の髭と髪を植えつけたという、生前に作られた等身大の、みごとな一休の木像がございます。

それから一休が実際に亡くなる田辺の酬恩庵にも、同じ木像がございますが、こちらにはさらに、生前に作った寿塔があります。寿というのは寿命の寿、命長しという寿です。塔はタワー、お墓のことを寿塔といいますが、今お開きいただいている一休宗純略年譜の、一四七五年文明七年、八十二歳、薪の酬恩庵に寿塔をつくり、慈楊塔と名ずくとある、その寿塔でございます。酬恩庵に、寿塔をつくったというのです。生前にお墓を作ったわけです。生前につくる墓というのは、これも実は中国に根拠があるので、そちらの方を申し上げたいのですが、生前に墓をつくるという傾向は、王様とか権力者の発想でありまして、こういう人はだいたい権力を握った日から墓をつくり始めます。墓への執念、はかない執念と言ってもいいのですが、この墓への執念というものが、人類の文明を生み出す原動力であったわけです。中国は長い文明の歴史を持つがゆえに、寿塔の制作というものは、これは古墳時代から、ずっとつづいているわけです。いわば地下宮殿です。こういう伝統が、禅の領域に入ってくると、寿塔になるのです。京都の苔寺ですとか、あるいは竜安寺であるとか、いわゆる禅の名園と言われているものを、私はだいたい寿塔だと考えていま

す。権力者が生前に、自分の墓のつもりでつくりあげていったもの、それが次第に庭園化していくわけです。

薪の酬恩庵に、一休の寿塔があるということは、だいたい八十二歳前後から、自分の死をはっきりと意識していたわけです。そこからして、この時代の漢詩作品を、あとづけていくことができるわけです。生前につくる墓は、やはり比翼塚なのです。この墓にはやはり一人で入るよりは、二人で入るのがよい。藤の木古墳も、お二人という学者がおりますが、墓はやはり二人用です。さきほどの辞世でも、やはり二人、相棒がいるわけです。しかし、あまりこれは生の話にもっていかないで、墓というものに限って考えたい。そういう二人寝の墓という、文学的構想というものが大切なのです。慈楊塔という名をつけますのも、そういう根拠によるわけです。これは慈明と楊岐という、軟派第一の師弟の同性愛の対話をふまえています。

薪に自分たちの墓を、つまり寿塔をつくる頃、一休は大徳寺に残る弟子たちに、自分の木像に髭と髪の毛を植えつけてやります。もちろん薪にも、同じものを残すわけです。こういう晩年の一休の行動と、こういう作品を合わせ考えながら、『狂雲集』をあれやこれやと探ってまいりますと、コピーの裏の右の方につけておきました、やや長い漢文ですが、辛抱して付き合っていただけたら、大変おもしろいことが分かります。これくらいおもしろいものはない、今日はせっかくお越しいただいたのですから、この漢文のどこかを少しでも、一丁ものにしていただけたなら、もうけものだと思います。一休が一休になる。つまり、この人の軟派文学の出発というものが、まさしくこういうところから始まることが、はっきり分かってくるわけです。

さっきから一休、一休と言っておりますけれども、一休はいくつか別の名前を持っています。まず第一が一休、それから周建、それから宗純というのがございますが、それぞれに理由があります。もうひとつ夢閨というのがあります。この夢閨という名前の名乗り初めが、だいたい七十歳前後です。六十七、八歳頃から八十歳以後にかけて、夢閨と名乗りはじめるのです。これはペンネームであります。いわば軟派文学の出発を、自ら記念する作品だろうと思います。そしてこれが寿塔になり、先ほどの辞世になっていくわけです。こういう一休が自ら敷いた、晩年の構想というものは、見事に室町、戦国、江戸、明治を貫いて、現代にまで自作他作の作品を生み続ける、根本の理由となるのであります。

いったい、夢閨というのは、寝床の夢を見る、ベッドの夢です。寝床というのは、一人用のものではいけないので、ダブルベッドですが、そんな夫婦の寝床を夢見るという、

閨房を夢見るという夢閨の二字を、自分の号に選ぶわけです。一休という名前も、よく一休みとか何とか言いますが、これは江戸時代にできる、一休みという解釈です。本来は一人寝のこと、それが一挙にけりがつくという、いっぺんに終わる。万事窮すというと、悪い方へいきますが、一休というと、一人寝問題がいっぺんに片づくわけです。

お茶の千利休の場合も、休はそういう意味を持っていて、同じ意味でつながるわけですが、何といっても、一休という言葉が含んでいるおもしろさは、一人寝のところです。「休」というのはお休みなさい、寝るという意味で、一人で寝る意味になります。一人寝の一休が、二人寝の夢を見ているわけでありまして、一生一人寝してきた一休が、二人寝の夢を自らの文学のモチーフにすえる、そんな記念すべき作品が、この『夢閨記』であります。ざっとよんでみますと、「渇しては水を夢みる、寒いときは皮衣を夢みる……」。テキストは一休の生前に、弟子が書いた『狂雲集』の写本で、一番確かなものです。一休の『狂雲集』という実像に迫るには、このコピーの部分が、一番の手掛かりになるわけです。

「焉」という字がありますが、渇するや焉、それにかっすというふうに、ちょっと、息が入るわけです。「渇するや焉」、喉が乾くから、水の夢を見るのです。「寒きや焉、凍ゆや焉、皮衣を夢見る」。喉が乾けば水の夢を見る、寒ければ皮衣を着る夢を見るわけです。「閨房を夢見るは　すなわち予の生まれつきなり」。夫婦の寝床の夢を見るのは、わたしの生まれながらの本性である。習い性となったのである。今うっかり習い性と言いましたが、十三歳で色歌を覚えた一休は、まさに閨房を夢見る作家となる、これはそんな作家魂の所在を示す、もの凄い言葉だと思います。一生寒く飢えた人ゆえの、暖かくて色っぽい寝床です。

「今古の世　三夢の称有り」。近頃、夢と名乗るお坊さんが三人おります。いわゆる夢窓、夢嵩、無夢和尚なり。夢窓は、今言いました京の五山の事実上の創始者でありました。

当時としては、国立大学の創始者であった夢窓、夢窓疎石です、つまり天竜寺と相国寺、花の御所のとなりにあって、総理大臣の寺であります、この寺をそうこくじと言わないでほしいのです。相国（しょうこく）の寺であります、足利幕府の学問所として、相国寺ができるのですが、その開山が夢窓なのです。だから、夢窓と言えば、この時代最高の名僧であるわけです。その夢窓が、なぜ窓を夢見ているのか、これがまた問題となりますが、脱線しないように気をつけて、次に夢嵩と無夢、こちらも脱線しそうですが、この当時としては、夢窓系統の代表的高僧と見ておいていただい

たらと思います。

「予はこの頃、夢閨をもってわが斎に扁す」。「扁」というのは、額をあげることです。自分の書斎にそういう名前の看板を掲げたというのです。「私はこのごろ、夢閨をもって自分の書斎の看板とした」。その名は「三夢の躅を践むと雖も」。躅は、芳躅などといいますように、美しい足跡であります。三人の高僧の夢を追うようではあるが、実は三夢の事には同じからずでありまして、名前は借りたが、中身は違うのだ。

「蓋し、彼の三師は隆徳声望、人の推す所と為る」。徳も高く、世の信用も厚い、世の中に徳望があります。みなさんから、慕われた三人です。ところが、「余は則わち老狂の薄倖」。ここが実は最も大事なところなんです、私は老いぼれの薄倖、この薄倖というのが、コピーの左の最後につけておきました、『三休詩』の代表作家、一休がいちばん好きな杜牧の作品を踏まえた言葉であります。そして薄倖というのは、いい意味でいうのです。誇り高き気分をもっているのです。最初に申しました、自由奔放のことです。気まぐれもいいところです。残念ながら、その杜牧の原作に入っていく余裕が、すでに全くなくなってしまいました。

〔おわび〕

以下、『夢閨記』の解釈については、私の『一休』（日本の禅語録十二、講談社）を、晩年の一休その人の生きざまは、同じく私の『一休――狂雲集の世界』（人文書院刊、一九八〇年）に、あらましの私見があるのを、あわせ参照いただけると幸甚です。

日韓大学出版部協会合同セミナーに参加して

小野沢　公男
（産業能率大学出版部）
山下　正
（東京大学出版会）

第七回日韓大学出版部協会合同セミナーは秋も深まった一九八八年十一月十八日～二十日の三日間、韓国の古都慶州の朝鮮ホテルを会場に開催された。

韓国側は、琴東信会長の檀国大学校、朴大圭副会長の慶北大学校をはじめ全国各地から三七大学校六十名が参加した（開催国なので当然だが、約半数は出版課長など現場の担当者が出席した）。日本側は、過去最高の八名で代表団を構成した。団長・山田渉（東海大）、副団長・山下正（東大）、団員・高野昭吉（電機大）、三浦邦宏（明星大）、小野沢公男（産能大）、オブザーバー・杉野明夫（大阪経法大）、安井正幸（東方書店社長）、通訳・呉銀淑（東海大）である。

今回は、韓国側の希望する「中国を含む北東アジアにおける出版交流」をメインテーマに、中国の出版状況について双方が報告を行なった。

まず康寔鎮（釜山大学校・幹事）氏が「中国との出版交流と対応」と題して、短期間の中国留学（滞在）経験を基に、中国における出版業の現状を報告した。これはいわば中国の出版活動の概況ともいうべきもので、出版社の数、分布状況、発行点数・部数、編集と印刷、流通上の特徴、定価、各出版社の専門領域等々が示された。

さらに、質疑応答では①中国では出版物に対する検査＝言論に対する統制は深刻に考える必要はない、②中国には韓国人が二、三百万在住しており、これが両国の出版交流の糸口になる可能性がある、③中国の出版社は学術的に価値の高いものを出版したいと思っている、といった点が話題になった。

つぎに、山下正（東京大学出版会）氏が「中国大学出版社協会との交流について」と題して、三回の訪中と北京大学出版社・人民大学出版社等との会合の経験をふまえ、中国大学出版社協会の結成、現在の組織及び人事、高等教育の状況と大学出版社の役割、大学出版社の編集体制の特色、流通システム、中国出版界の新しい課題（自主権と経営問題）、日本大学出版部協会との交流の新段階等について報告した。また、'88北京国際図書博覧会および中国における著作権問題についても若干触れた。

質疑応答では、日本の大学出版部協会が中国大学出版社

日韓大学出版部協会合同セミナー

協会と交流する積極的な意図は何か、どこにメリットがあるのか、が最大の話題になった。また、日本の大学出版部に対する一般的な質問としては、①一般の出版社と大学出版部とのちがいは何か、②大学出版部が生き残る方法は何か、③大学出版部はどの程度評価されているのか、といった問題が提起された。具体的問題としては大学出版部の組織形態と税金問題、税率も出された。なお、報告のうち、中国の大学の数と大学出版社数のデータ上の事実問題で紛糾したことも付け加えておこう。

報告・討論は三時間に及び、中国の出版事情をめぐって熱のこもった議論になったが、夜の自由時間における意見交換も含めて、韓国大学出版部協会の中国に対する強い関心が極めて印象的であった。その背景にはオリンピックの成功と経済発展、国内における「民主主義化」の「進展」等があり、その自信と確信がこのような前向きの姿勢となっているのかもしれない。

そして、もう一つのテーマ「大学出版部の諸問題」は、金禹昌（高麗大学校出版部長）氏が報告されたが、これは韓国大学出版部協会の課題であり、通訳も行なわないということで、日本側はこの議論には加わらなかった。

最後にセミナー終了後、韓国大学出版部協会本部のあるソウルの檀国大学校を訪問した。

北海道大学図書刊行会

■札幌の電植機第一号は一九七五年。写研のAシステムとよばれるものだった。印刷所の営業さんは誠実で、「何でもできます」とは言わなかったが、それにしてもよく「お化け」が出た。あれから十余年、活版印刷は五%にも満たなくなった■小会の刊行物は圧倒的に理系のものが多い。当然、横組み和欧数式混植ということになる。かなり改善されたとはいえ、電植によるハンパの処理のされ方には泣かされる。最後は手貼りということもしばしばだ■先ごろ写研本社を見学する機会を得た。「万能」のワークステーションSAIVERT−H202には一同目を剝いた。一方、件のハンパの処理については機械まかせではまだ無理な所があるそうで、当分手貼りにも頼らざるを得ないとは割り切れない思いだ。

慶應通信

◇新刊紹介

『リコーナ博士の子育て入門=道徳的自立をめざして』三浦正訳（三九〇〇円）本書は教育学者の書いた育児書である。両親や教師が子供の道徳性の発達段階を正しく理解して育てゆく方法、また子供が未成熟なゆえに起こすさまざまなトラブルや非行などに正しく対処する方策などを、多くの事例をもとに明快に述べる、幼児から青年期にいたる子育ての手引書である。

『こころの時代の教育』伊藤隆二著（一八〇〇円）ものの繁栄に酔って、こころの衰退を招いている現代において、こころはどのように育つか、またその蘇生は可能なのか。今やこころの時代の到来を告げる著者が、家庭・学校・社会における教育が目指すべき方向と方法を示している最先端の教育書である。

大学出版部ニュース

産業能率大学出版部

ノーベル賞受賞の経済学者アーサー・ルイスの名著『人種問題のなかの経済』は、刊行後、多くの書評にとりあげられた。

経済発展に関する専門家である著者が、人種問題について論じるのは、彼が西インド諸島セント・ルシア島生まれの黒人であることを考えると、強い興味がわく。経済大国となった日本が、いずれは直面するであろう問題である。

『株式公開会社倍増時代』はタイミングの合った刊行だった。リクルートコスモスの未公開株譲渡問題で、世の中は大分ゆれたが、株式公開の本来の意義は、企業の資金調達の道を広く公開市場に求めることにある。経済の構造変化が激しい時代に、優良中堅・中小企業の株式公開の道を開く本書は、正にグッド・タイミングで、即増刷中だ。

玉川大学出版部

『ハーバード大学の戦略』D・ボック著・小原芳明監訳 A5／三五〇〇円

●学部教育におけるカリキュラム問題、専門大学院の役割と将来、専門職と行政職のための教育、コンピュータ革命のもつ意味、社会変化に応じた改革など大学問題の総点検とそれへの意欲的な取り組み方と改革の提言を、大学の管理者の立場から大胆に示す。……「読売新聞」評

●ハーバード大学学長の任にある著者が、米国の大学が社会の変化にどう対応してきたか、大学の未来をどのように切り開いていくかなど、自らの経験と思索をふまえて縦横に説く。公職者、管理職、医師などのための「継続教育」に参加する非伝統的学生が四五〇〇人もいるハーバード大学の展開には目を見張らされる。……「毎日新聞」評

中央大学出版部

今栄蔵著『貞門談林俳人大観』

江戸三百年間は俳諧の全盛期で、幕末期には江戸だけで四、五十人もの宗匠が門戸を張り、毎月の俳句の応募者は全国に及び、莫大な数の俳句が毎月生産されていた。その俳諧全盛時代の基礎は、俳諧史上、貞門時代と談林時代といわれる通計約半世紀に確立したといわれる。この間に俳諧作者群は京・大阪・江戸を中核として、北は松前から南は鹿児島に至るまで、全国津々浦々に出現し、木版出版された作品集も四百点近い。

本書はその全作品集の各集ごとに作者名と入集作品集、住国・姓氏・別号その他の事項を調査して集単位でリスト化したもので、この時代の全俳人の俳歴伝記が本書一冊で洩れなく調べ出せる基本的な研究資料である。

（定価一五、〇〇〇円）

東海大学出版会

サンゴ礁の保護で版元も基金に協力

二百十七種のサンゴをカラー生態写真を使って紹介したのがフィールド図鑑『造礁サンゴ』（西平守孝著・東海大学出版会刊・二、五〇〇円）。沖縄・白保などサンゴ礁を守る運動が注目されているが、この本は、代表的な群体や、環境条件によって変わる群体の形や色について解説。美しいサンゴ礁を残すための一助にと、本にはさまれているはがきにシールをはって送ると、版元から日本自然保護協会の「ニライカナイ・ユーサンゴ基金」に、一枚につき、百円の寄付をすることになっている。

（朝日新聞・一九八九年一月九日付・書評欄より）

東京大学出版会

がんはいまや死亡原因の第一位を占め、また年々その死亡率は増え続けている。がんよ、驕るなかれ、と誰しもが思う。

そのがんとがん研究の本当の姿を一般の人たちに理解してもらえるようにと企画されたのが黒木登志夫・武部啓・豊島久真男・菅野晴夫編『**目でみるがん研究**』（定価三八〇〇円）。書名からもおわかりのように、数多くのカラー写真や図版を用いて、日本のがん研究の歴史から最新の研究成果にいたるまでを親しみやすく、かつわかりやすく解説している。

これまで好評を博してきた『目でみる脳』『目でみるリハビリテーション医学』などの〝目でみるシリーズ〟に新たに加わった一冊として、広く読まれることを願っている。

東京電機大学出版局

〈書評抄録〉『パソコンによるスプライン関数―データ解析／CG／微分方程式―』桜井明監修吉村和美・高山文雄共著／定価二八〇〇円

スプライン関数の理論と応用についての解説書。BASICによるパソコン用のプログラムが掲載されている。内容はスプライン関数の基本、補間関数、パラメトリック・スプライン（曲線補間、曲面補間）、スプライン関数の微積分、微分方程式への応用、データ点列の平滑化など。入門書として書かれているが、数式を用いてかなり細かく解説してある本である。始めから通して読むより、必要に応じて適当な個所を参照する読み方が良いようだ。収録したプログラムはフロッピー・ディスクの形で別売りしている。

『日経CG（一九八九・二月号）』評

東京農業大学出版会

各地で一村一品運動や町起こしの目玉として、新しいものの開発、古きよきものの改良等に努めているが、北海道ではめん羊飼養農家が増加してきた。帯広畜産大学・福井豊助教授は「**めん羊の繁殖技術**」を発刊した。

これまで、めん羊飼養技術書、特に繁殖技術に関するわかり易い書は見あたらなかった。この要請に応えたもの。

右田一雄著「**森林種苗学**」

本書は学生を対象に、スギ、ヒノキを中心として育苗に対する基本的な事柄を理解してもらうために解説した書である。立派な森林を作るためにはまず優良苗木の生産が第一。内容は、品種・開花結実・結実の豊凶・結実の採集・タネの精選と貯蔵・タネの品質鑑定・タネの発芽・苗木の生理・苗畑・その他必要欠くことのできない問題点。

東京理科大学出版会

■月刊誌「SUT」　理科大の英文名の頭文字で、B5判、六〇数頁のもので、各家庭で簡単に科学知識を得られるよう毎号一定のトピックスを組んでいます。その他、物理・科学実験数学・科学英語のセミナー欄を設けて勉学指導の便を図っています。

○最近の特集

品質管理の現状と展望
薬の副作用
ものの中をみる
色彩心理と生活
レーザーで何ができるか
老化と寿命の化学
マンガン団塊―新金属鉱物資源
乗り物
スーパーコンピュータ
国際化時代の理工系大学教育

（定価四三〇円　年間購読会員五千円）

大学出版部ニュース

法政大学出版局

陣内秀信著／執筆協力＝大坂彰

『**都市を読む＊イタリア**』

A5判・518頁・5900円

▼…一貫するものは私たち同様あのイタリア都市への惚れ込みであり、それが緻密なフィールドワークで裏付けられているのだからこれは面白くないはずはない。…イタリア旅行にはゲーテの〝イタリア紀行〟と共に必携の書になっている。**東京新聞**

▼…豊富な資料と相まってその叙述はスリリングだ。…題材の魅力もさることながら、通時的分析と共時的分析とがこれほど立体的に融合した例はそうはあるまい。**流行通信・HOMME**

▼…都市分析の実際がよくわかると共に、陣内さんのイタリアへの愛が伝わってくる…。**室内**

▼…同国の都市・建築、都市史学に関心のある読者にとって必読書…。**日経アーキテクチュア**

明星大学出版部

土持ゲーリー法一著

『**占領下ドイツの教育改革**』

本書は、占領下ドイツの教育改革がどの様に行なわれたかを、アメリカ対独教育使節団の成立およびその報告書の作成経緯について考察した書である。アメリカ対独社会科委員会の報告書は、学校現場で社会科の授業をどの様に進めるかを、具体的に勧告した実践的なものであり、当時の国務省関係者にもまったく知らされていなかった事実を、著者は、米国国立公文書館に所蔵されているドイツ占領軍政部文書を中心に、当事者の証言およびインタビューなどを通して実証的に論じている。

アメリカの占領は、ドイツに限られたものではない。ドイツの教育改革は、日本における社会科の導入を見る上で貴重な示唆を与えている。

早稲田大学出版部

▼紅野敏郎『近代日本文学誌―本・人・出版社』(定価一三五〇〇円)が好調な売行きを示している。朝日新聞「無名作家に目配りした近代文学史の大著」、谷沢永一氏「今後の研究者にとって必読の書となるべき好著」など、世評もきわめて高い。

▼中野幸一編『奈良絵本絵巻集』(全12巻・別巻3、定価各一二〇〇〇円)が完結した。読者のご支持を得て、別巻3を追加配本したシリーズである。

▼早大演劇博物館編『演劇博物館資料ものがたり』(定価五〇〇〇円)は坪内逍遙の日記、堀越加納の談話筆録等これまで未公開の資料を翻刻し解説を付す。

▼木村時夫『昭和史を語る』(全三冊、定価各一五〇〇円)が完結した。歴史の現場に居合せた人びとの証言を随所に取り入れた異色の昭和史である。

名古屋大学出版会

▼梅津濟美訳『ブレイク全著作』(一六〇〇頁・二万円)宇宙的感覚の表現者、詩人・思想家・画家として今世紀に入ってその評価のいや増すウィリアム・ブレイク全作品の世界に先駆ける個人完全訳。カラー図版多数を収めて今年度小会の最大の企画である。

▼田中秀央著『ラテン文學史』四十数年前に刊行されながら、今なおラテン文学研究者に不可欠のヨーロッパ文学通史としての知識を提供する名著の覆刻。

▼安藤隆穂著『フランス啓蒙思想の展開』、村上信一郎著『権威と服従』。ともに若い研究者の処女作品で、前者は奇しくもフランス革命二〇〇周年に革命の思想的源流を究明する。後者はカトリック政党の政治社会学的分析を通じて、危機における政治と宗教の関係を見据える。

大学出版部ニュース

関西大学出版部

本学経済学部角山幸洋教授編著『中国・和蘭羊毛技術導入関係資料』が昨年十月第九回野口真造記念染織研究奨励賞を受賞した。

本書は、江戸幕府が増大する輸入毛織物を防遏するため国産化を計画し、オランダより技術導入をはかるが成功をみず、そのため中国の技術者を長崎に招聘し、『毛氈製造手順書』の記録を作成した。これをカラー図版で再現し、さらに関係未刊書を収録、解説を加えている。

同賞の選考委員金井圓氏は、「色彩版を含む複製と厳密な釈文とすぐれた解説は、とりわけ染織史の研究に寄与するところが大きく(以下略)」と高評している。

著者は目下、藤の木古墳出土の繊維製品の究明に関与しており、その成果が待たれる。

九州大学出版会

▼成瀬悟策教授退官記念シンポジアム『**動作とこころ**』A5・六六〇頁・八五〇〇円。さきに刊行した『現代心理学への提言』のいわば続編。動作と障害(動作訓練)、動作と心理療法、動作の心理学的基礎(実験動作学)の三部を合わせて一冊とした。翔門会の若き心理学徒の新しい心理学への大いにアンビシアスな試みであり、おのずと現在の日本の心理学の研究の水準を示している。▼中楯興編著『**日本における海洋民の総合研究**』A5・上巻四一二頁、下巻五八〇頁・各四八〇〇円。日本を代表する海洋民であり、大規模かつ広汎に日本列島の沿岸を操業した沖縄の糸満系漁民のあとを追い、資料収集と古老の聞取りを中心とした五年にわたる総合的・学際的研究の成果。不羈奔放な漂泊漁民の実像を鮮やかに描く。

新刊案内 '88・10～'89・3

（表示価格には消費税は含まれていません）

■北海道大学図書刊行会

生命現象と生化学　八木康一・石井信一　一六〇〇円
北海道で平和を考える　深瀬・森・中村編著　一六〇〇円
氷の科学　新装版　前野　紀一　一五〇〇円
北大法学部を読む　北大法学部編　九八〇円
VRT (Visual Reaction Test) as a New Apparatus for Fatigue Measurement　K. Saito and T. Hosokawa　二五〇〇円
産業医学の進歩　斉藤和雄編　三九〇〇円
ドイツ観念論における「自律思想」の展開　田村　一郎　四五〇〇円
水・水溶液系の構造と物性　荒川　泓　五八〇〇円
雇用官僚制―アメリカの内部労働市場と「よい仕事」の生成史―　S・M・ジャコービィ／荒又・木下・平尾・森訳　四五〇〇円
アメリカ・インディアン史　新装版　W・T・ヘーガン／西村・野田・島川訳　一八〇〇円
アメリカにおける政教分離の原則　増補版　熊本　信夫　七八〇〇円
雪の文様　高橋　喜平　二五〇〇円

■慶應通信

倫理学とは何か　日本倫理学会編　二八〇〇円
国際秩序の変化過程における発展途上国の都市化と近代化―東南アジアの事例―　矢崎　武夫　二〇〇〇円
中国党軍関係の研究(上)―党軍関係の法的形成と政治展開―　川島　弘三　三二〇〇円
〃　(中)―国防現代化過程と党軍関係―　川島　弘三　二六〇〇円
〃　(下)―対外戦略の形成と党軍関係―　川島　弘三　二六〇〇円
新種保険論〈慶應義塾大学商学会商学研究叢書〉　庭田　範秋　三〇〇〇円
続　律令制の研究　利光三津夫　九〇〇〇円
リコーナ博士の子育て入門―道徳的自立をめざして―　トーマス・リコーナ／三浦　正訳　三九〇〇円
人口学あ・ら・かると　安川　正彬　九八〇円
こころの時代　伊藤　隆二　一六〇〇円
大都市圏の拡大と地域変動〈慶應義塾大学法学研究会叢書47〉　十時厳周編　八六〇〇円
眼のはたらきと学習　原田　政美　一八〇〇円
東アジア鉄道国際関係史―日英同盟の成立および変質過程の研究―　井上　勇一　五五〇〇円
スウェーデン犯罪防止委員会報告書概観　一九八一年―一九八七年　坂田　仁　五〇〇〇円
近代中国人物研究　山田辰雄編　四八〇〇円
十九世紀米国における電気事業規制の展開〈慶應義塾大学法学研究会叢書48〉　藤原淳一郎　四五〇〇円

■産業能率大学出版部

人種問題のなかの経済　W・ルイス／益戸欽也訳　一八〇〇円

講義を聞く技術　産能短大日本語研究室　二〇〇〇円
ビジョン・マネジメントのすすめ　産能大経開研究所　二〇〇〇円
マーケティング企画学　北岡　俊明　一五〇〇円
職務経歴書の書き方・活かし方　寺沢　恵　一五〇〇円
株式公開会社倍増時代　後藤　光男／秋野　正司　二八〇〇円
'90年代ヒットマーケット　赤澤　基精　一三〇〇円
管理能力倍増のツボ　秋元　隆司　一四〇〇円
感性の磨き方　国司　義彦　一三〇〇円
転回の経営　田辺　昇一　一二〇〇円
'89年版税金対策　東　勇幸　一五〇〇円
新訂入門ビジネス文書　三沢　仁　一六〇〇円
広告のことがわかる本　川勝　久／上畑　武志　一五〇〇円
新製品の開発・生産化・マーケティング戦略　西塚　宏　三九〇〇円
最新人事の基礎知識　小嶋　廣喜　一六〇〇円
終身現役族への転身　田中　真澄　一三〇〇円
マーケティング調査とデータ解析　本多　正久　二五〇〇円
人材開発の考え方・進め方　水井　正明　二五〇〇円
インタビュー作法　和泉　育子／石井　正子　一二〇〇円
決定版・サービス学　小林　宏　二〇〇〇円

■玉川大学出版部
ジョセフ・アルバースの視覚世界　J・アルバース&F・ブシェ／首藤順蔵訳　三二〇〇円
隠者の夕暮・白鳥の湖・基礎陶冶の理念〈西洋の教育思想7〉　J・ペスタロッチー／東岸克好・米山弘訳　四二〇〇円
ハーバード大学の戦略　D・ボック／小原芳明監訳　三五〇〇円
朗読劇ハンドブック　L・コーガー&M・ホワイト／岡田陽ほか訳　五〇〇〇円
近代日本高等教育研究　天野　郁夫　一〇〇〇〇円

■中央大学出版部
自主管理の構造分析　中央大学社会科学研究所編　二八〇〇円
ラシーヌの悲劇　金光仁三郎　五五〇〇円
ドイツ経済史入門―前工業社会から転換期の一九七三年まで―　K・ボルヒャルト／酒井昌美訳　一五〇〇円
New Ideas of Teaching Mathematics in Japan　小林　道正　一〇〇〇〇円
米国刑事判例の動向I―合衆国最高裁判所判決―　渥美東洋編　四九〇〇円
貞門談林俳人大観　今　栄蔵　一五〇〇〇円
Conflict ant Integration; Comparative Law in the World Today　日本比較法研究所編　二〇〇〇〇円
調停と法―代替的紛争解決（ADR）の可能性―　小島武司編著　四三〇〇円
イスラームの国家と統治の原則　M・アサド／真田芳憲訳　二〇〇〇円
児童救済運動―少年裁判所の起源―　A・M・プラット／藤本哲也・河合清子訳　二五〇〇円
民事司法の展望―裁判所の役割と司法改革―　M・ローゼンバーグ／小島武司・大村雅彦編訳　二三〇〇円
イギリス・ルネサンスの諸相―演劇・文化・思想の展開―　中央大学人文科学研究所編　四二〇〇円
民衆文化の構成と展開―遠野物語から民衆的イベントへ―　中央大学人文科学研究所編　三六〇〇円

■東海大学出版会
日中交流二千年〔改訂版〕　藤家禮之助　二八〇〇円

コウモリの生活戦略序論〈動物⑮〉　松村　澄子　一八〇〇円
日本の植生―侵略と撹乱の生態学　矢野悟道編　二八〇〇円
東京遷都と地方の危機　磯村　英一　一八〇〇円
河口・沿岸域の生態学とエコテクノロジー　栗原　康編　六〇〇〇円
The Limits of Defense　松前　達郎　五〇〇〇円
海洋生物の石灰化と系統進化　大森・須賀・後藤編　七〇〇〇円
造礁サンゴ〈フィールド図鑑〉　西平　守孝　二五〇〇円
レンズ光学―理論と実用プログラム―　草川　徹　四八〇〇円
芽胞学　蜂須賀養悦　八五〇〇円
FORTRAN基礎数値計算　小島紀男・町田東一　二八〇〇円
プロ野球誕生前夜　東田　一朔　一五〇〇円
日本の水生昆虫　柴谷篤弘・谷田一三編　二八〇〇円
Legal Pluralism　千葉　正士　七〇〇〇円
高等教育における教授活動―評価と訓練―　L・エルトン／香取草之助監訳　二八〇〇円
日本文化史―日本の心と形―　石田　一良　六五〇〇円
エネルギー変換技術入門　平井　慶彦　三〇〇〇円
北京最後の日　P・ロチ／船岡末利訳　二〇〇〇円
ビザンツ帝国の政治的イデオロギー　H・アルヴェレール／尚樹啓太郎訳　二五〇〇円
SIPRI 年鑑 1988　ストックホルム国際平和研究所編　一五〇〇〇円
訓讀説文解字注〈絲冊〉〈東海大学古典叢書〉　尾崎雄二郎編　三四〇〇〇円
文章構成法　森岡健二編著　一〇〇〇円
コンピュータ入門　三木　容彦　二五〇〇円
電気・電子計測技術入門　斎藤・有賀・加藤・関谷　二五〇〇円
生化学入門　村上　枝彦　一六〇〇円
劉向『列女傳』の研究　下見　隆雄　一七〇〇〇円
史通内篇〈東海大学古典叢書〉　西脇常記訳註　一六〇〇〇円
現代の軍備管理・軍縮　佐藤　栄一　九五〇〇円
Nagoya Lectures in Physics and Controlled Fusion　市川芳彦・上村鉄雄編　二五〇〇〇円
伊豆の海水魚〈海中図鑑〉　益田　一編　一五〇〇円

■東京大学出版会

機械の知　人間の知〈認知科学選書20〉　辻井潤一・安西祐一郎　一八〇〇円
パリのフランス革命〈歴史学選書9〉　柴田三千雄　二二〇〇円
エル・チチョンの怒り〈新しい世界史10〉　清水　透　一八〇〇円
日本考古学史―年表と解説―〈UP考古学選書1〉　勅使河原彰　一八〇〇円
もう二つの日本文化―北海道と南島の文化―〈UP考古学選書2〉　藤本　強　一八〇〇円
近世日本と東アジア　荒野　泰典　四八〇〇円
利益集団〈現代政治学叢書14〉　辻中　豊　一八〇〇円
スウェーデン現代政治　岡沢　憲芙　二〇〇〇円
従属の政治経済学　メキシコ　恒川　恵市　二二〇〇円
企業財務　若杉　敬明　二八〇〇円
インド経済概論　V・N・バラスブラマニヤム／古賀正則監訳　三八〇〇円
酵素のはたらき〈UPバイオロジー70〉　徳重　正信　一四〇〇円
衆議院委員会議録45　衆議院事務局編　九〇〇〇円
衆議院委員会議録46　衆議院事務局編　九〇〇〇円
Culture and Management in Japan　Shuji Hayashi　三五〇〇円
島の考古学―黒潮圏の伊豆諸島―〈UP考古学選書3〉　橋口　尚武　一八〇〇円
室町幕府守護制度の研究　下　佐藤　進一　三八〇〇円

公共選択〈現代政治学叢書9〉　小林　良彰　一八〇〇円
ニューディールとアメリカ民主政　久保　文明　五八〇〇円
太平洋国家オーストラリア　川口　浩・渡辺昭夫編　三五〇〇円
現代日本経済　小宮隆太郎　福武　直　三二〇〇円
二一世紀への課題　二〇〇〇円
森林文化政策の研究　筒井迪夫編著　四二〇〇円
水産資源学　能勢幸雄・石井丈夫・清水　誠　三六〇〇円
エチレン〈UPバイオロジー72〉　下川　敬之　一四〇〇円
建築形態の構造　香山　壽夫　二〇〇〇円
衆議院委員会議録47　衆議院事務局編　九〇〇〇円
衆議院委員会議録48　衆議院事務局編　九〇〇〇円
道〈東京大学公開講座48〉　編集代表　森　亘　二二〇〇円
三角縁神獣鏡〈UP考古学選書4〉　近藤　喬一　一八〇〇円
日本女性史研究文献目録Ⅱ　女性史総合研究会編　五〇〇〇円
認識し行動する脳　伊藤正男・佐伯　胖編　三八〇〇円
政治参加〈現代政治学叢書6〉　蒲島　郁夫　一八〇〇円
占領改革、自民党支配〈日本政治史4〉　升味準之輔　二五〇〇円
ジャン＝ジャック・ルソー論　吉岡　知哉　四八〇〇円
日本経済研究　岩田規久男・石川経夫編　五〇〇〇円
社会問題〈リーディングス日本の社会学11〉　三谷鉄夫・大山信義・中川勝雄編　二八〇〇円
テクノクラシーと社会運動〈現代社会学叢書15〉　梶田　孝道　三八〇〇円
古細菌〈UPバイオロジー73〉　古賀　洋介　一四〇〇円
微分方程式入門〈基礎数学6〉　高橋陽一郎　二二〇〇円
高山寺善本図録　高山寺典籍文書総合調査団編　三〇〇〇〇円
貝塚の考古学〈UP考古学選書5〉　鈴木　公雄　一八〇〇円
北アジア遊牧民族史研究　山田　信夫　一〇〇〇〇円
世界諸国の制度・組織・人事　秦　郁彦編　三〇〇〇〇円

国際的相互依存〈現代政治学叢書18〉　山本　吉宣　一八〇〇円
日本の中小企業　土屋守章・三輪芳郎編　三二〇〇円
大恐慌とニューディール財政　土生　芳人　六二〇〇円
女性のライフサイクル　N・オザワ・木村尚三郎他編　四六〇〇円
社会政策の社会学　社会保障研究所編　四四〇〇円
日本経済と雇用政策　氏原正治郎　五四〇〇円
日本の労使関係と労働政策　氏原正治郎　五四〇〇円
歌舞伎美論　河竹登志夫　三五〇〇円
動物分類学入門〈UPバイオロジー74〉　佐々治寛之　一四〇〇円
衆議院委員会議録49　衆議院事務局編　九〇〇〇円
衆議院委員会議録50　衆議院事務局編　九〇〇〇円
イオマンテの考古学〈UP考古学選書8〉　宇田川　洋　一八〇〇円
未完の占領改革〈新しい世界史11〉　油井大三郎　一八〇〇円
対外政策〈現代政治学叢書20〉　佐藤　英夫　一八〇〇円
自由民権と大隈・松方財政　大石嘉一郎　四八〇〇円
現代中国経済　小宮隆太郎　三八〇〇円
フランスの社会保障　社会保障研究所編　四四〇〇円
近代日本図画教育方法史研究　林　曼　麗　五四〇〇円
農業経済学講義　佐伯　尚美　二八〇〇円
量子物理化学　大野　公一　三八〇〇円
目でみるがん研究　黒木登志夫・武部　啓他編　三八〇〇円
Neuroimmunological Diseases　Akihiro Igata　一二〇〇〇円
Japanese Management in Historical Perspective　T. Yui & K. Nakagawa　六〇〇〇円
Cutaneous Aging　A. M. Kligman & Y. Takase　一二〇〇〇円
Optimality, Equilibrium, and Growth　H.Uzawa　六五〇〇円
公共政策〈現代政治学叢書10〉　薬師寺泰蔵　一八〇〇円
SASによる実験データ解析　高橋行雄・大橋靖雄・芳賀敏郎　三八〇〇円

乱数〈UP応用数学選書12〉　伏見　正則　二七〇〇円
植物ウイルスと分子生物学〔第二版〕〈UPバイオロジー24〉　岡田　吉美　一四〇〇円
すぐれた授業とはなにか〈UP選書261〉　佐伯胖・大村彰道・藤岡信勝・汐見稔幸　一四〇〇円
中国文学史資料選　前野直彬・今西凱夫編　一五〇〇円
表面物理入門　塚田　捷　二五〇〇円
国語の論理　山口　明穂　二四〇〇円
社会発展への視座　庄司　興吉　二六〇〇円
風の世界　吉野　正敏　二四〇〇円
内発的発展論　鶴見和子・川田侃編　二九〇〇円
応用ミクロ経済学　西村和雄・伊藤元重編　三五〇〇円
続　古地震　萩原尊禮編　七六〇〇円

■東京電機大学出版局

ソフトウェア通論Ⅰ〈新情報テキスト〉　佐々木秀夫監修・ソフトウェア研究会　二〇〇〇円
図解内線工事―第二種／第一種電気工事士―　菊池矢一郎　二二〇〇円
パソコンによるスプライン関数―データ解析／CG／微分方程式―　桜井明監修　吉村・高山　二八〇〇円
電波法規〈1技・2技の徹底研究〉　吉川　忠久　一四〇〇円
上級MS―DOS&BASIC―構造化アルゴリズムの技法―　黒田　康夫　二三〇〇円
第二種情報処理試験全問題解答集〔'89春季版〕　二四〇〇円
続高分子科学教科書―材料・加工・応用編―　F・W・ビルマイヤー／田島・小川訳　三二〇〇円
第一種情報処理試験全問題解答集〔'89年版〕　二二〇〇円
電子回路通論(上)〈理工学講座〉　中村　欽雄　三五〇〇円
電気法規と電気施設管理〔新訂版〕　竹野　正二　二〇〇〇円
微細加工―サブミクロン素子への展開―　中野・星野・小松　二七〇〇円
図解制御用小形モータの活用　戸田・中村・寺嶋　二五〇〇円
日本的自然観の変化過程　斎藤　正二　一一〇〇〇円
改訂　早わかり第二種電気工事士受験テキスト　渡辺・須賀・茂木・角田　一八〇〇円

■東京農業大学出版会

めん羊の繁殖技術　福井　豊　一五〇〇円
森林種苗学　右田　一雄　二二〇〇円
東北における畜産の未来像―肉牛経営を中心として―　日本農業を考える　シンポジウム委員会　五〇〇円
二十一世紀における食と健康　日本農業を考える　シンポジウム委員会　五〇〇円

■法政大学出版局

イタリア人の太古の知恵　G・ヴィーコ／上村忠男訳　二〇〇〇円
言語の牢獄　F・ジェイムソン／川口喬一訳　二四〇〇円
失望と参画の現象学　ハーシュマン／佐々木・杉田訳　一九〇〇円
労働の現象学　J＝L・プチ／今村仁司・松島哲久訳　三〇〇〇円
知覚の本性　M・メルロ＝ポンティ／加賀野井秀一訳　一六〇〇円
日和山（ひよりやま）　南波松太郎　二四〇〇円
十八世紀ウィーンの民衆劇　原　研二　四八〇〇円
政治批判　1　法政大学大原社会問題研究所編　一三〇〇〇円
同時代　51　黒の　会編　一〇〇〇円
都市を読む＊イタリア　陣内秀信（協力・大坂彰）　五九〇〇円
ポール・ニザン　Y・イシャグプール／川俣晃自訳　三二〇〇円
政治的判断力　R・ベイナー／浜田義文監訳　二八〇〇円

はかない幸福―ルソー　T・トドロフ／及川　馥訳　一五〇〇円
大学制度の社会史　H＝W・プラール／山本　尤訳　三五〇〇円
反射概念の形成　G・カンギレム／金森　修訳　二七〇〇円
ルイス・キャロル　J・ガッテニョ／鈴木　晶訳　二九〇〇円
日本芸能史　6〈近世―近代〉　藝能史研究會編　二四〇〇円
輪廻の話―オリエント民俗誌　井本　英一　二二〇〇円
政治批判　2　法政大学大原社会問題研究所編　一三〇〇円
政治批判　3　法政大学大原社会問題研究所編　一三〇〇円
アメリカ演劇　3　全国アメリカ演劇研究者会議発行　八〇〇円
肉体の文化史　S・カーン／喜多迅鷹・喜多元子訳　二四〇〇円
篩（ふるい）　三輪　茂雄　二四〇〇円
農民運動　1　法政大学大原社会問題研究所編　一三〇〇円
バシュラールの詩学　及川　馥　二四〇〇円
古代ギリシア人　M・I・フィンレー／山形和美訳　二四〇〇円
生物学におけるランダムウォーク　H・C・バーグ／寺本英・佐藤俊輔訳　一六〇〇円
ディドロ著作集　3〈政治・経済〉小場瀬・平岡監修　四〇〇〇円
北前船の研究　牧野　隆信　八五〇〇円
ドイツ文学の社会史・上　J・ベルク他／山本・他訳　五八〇〇円
ドイツ文学の社会史・下　J・ベルク他／山本・他訳　五八〇〇円
続・彗星雑号〈ピエール・ベール著作集　6〉　野沢協　訳・解説　一九〇〇〇円
日本海島文化の研究　北見　俊夫　八五〇〇円
哲学　39　日本哲学会編　一二〇〇円
同時代　52　黒の　会編　一〇〇〇円

■明星大学出版部
技術者のための数学手帖　前沢成一郎　三六〇〇円
甦れ　姫街道　横山　吉男　九八〇円
占領下ドイツの教育改革　土持ゲーリー法一　二七〇〇円

■早稲田大学出版部
図録　大隈重信―近代日本の設計者―　早稲田大学編　三〇〇〇円
演劇博物館資料ものがたり　早稲田大学演劇博物館編　五〇〇〇円
早稲田精神の世界性〈リカレントブックス12〉　西原　春夫　四五〇円
狭衣の中将・鶴の草子・四十二の物争ひ　中野幸一編　一二〇〇円
奈良絵本絵巻集第12巻　紅野　敏郎　一三五〇〇円
近代日本文学誌―本・人・出版社―　G・ピール／大井邦雄訳　一四〇〇円
お婆ちゃんの冬物語　エリザベス朝喜劇10選第1巻　日本平和学会編　二二〇〇円
平和研究第13号　特集・日本のODAを考える　中野幸一編　一二〇〇円
本朝孝子伝　奈良絵本絵巻集別巻1　日本科学哲学会編　一七〇〇円
科学哲学21　特集・〈私〉の同一性　霜田美樹雄　三五〇〇円
キリスト教は如何にして現代に生きるか　竹本幹夫編　一五〇〇円
能楽資料集　早稲田大学蔵資料影印叢書第21巻　中野幸一編　一二〇〇円
武家繁昌㈡・うつほ物語㈢　奈良絵本絵巻集別巻2　尾島俊雄企画・監修　各巻三〇〇〇円
日本建築画像大系（ビデオ）　第2回制作作品10～17巻　木村　時夫　一五〇〇円
昭和史を語るⅢ〈早稲田選書5〉　早稲田大学大学院中古文学研究会編　六五〇〇円
源氏物語と平安文学　第1集　中野幸一編　一二〇〇円
花鳥風月・蓬萊絵巻・文正の草子㈡・福富草子　中野幸一編　一二〇〇円
奈良絵本絵巻集別巻3
アジア文化第13号　特集・中国の民族性と中国文化／

アジアの経済社会と文化　アジア文化総合研究所編　二二〇〇円
東行きだよーお！　エリザベス朝喜劇10選第4巻
G・チャップマン他／小野正和・山田英教訳　一四〇〇円
早稲田文学　3月号　早稲田文学会　四八〇円
世界のオンブズマン構想
D・C・ローワット／川野秀之監訳　二〇〇〇円
貞門談林俳諧集　早稲田大学蔵資料影印叢書第23巻
雲英末雄編　一五〇〇〇円
枕草子の研究　今井　卓爾　七〇〇〇円

■名古屋大学出版会
人間の探究　久保田勉・稲垣良典編　二〇〇〇円
赤字財政の経済学　水野正一編　二八〇〇円
イギリス・ロマン主義に向けて—思想・文学・言語—
川崎寿彦編　五〇〇〇円
現代日本語コース中級I—A Course in Modern Japanese Vol.3—
名古屋大学総合言語センター日本語科編　二五〇〇円
日本経済　観測と分析　馬場　正雄　三二〇〇円
情報処理教育センター利用の手引（第4版）
名古屋大学情報処理教育センター教育広報専門委員会編　四〇〇円
鑑別を主体とした細胞診断学
木村禧代二監修／田嶋基男・柴田偉雄編集　一五〇〇〇円
フランス啓蒙思想の展開　安藤　隆穂　五〇〇〇円
権威と服従—カトリック政党とファシズム—
村上信一郎　四三〇〇円

■関西大学出版部
表現と実在　竹尾治一郎　五五〇〇円
寛政元年土佐漂着安利船資料
松浦　章　三〇〇〇円
文化五年土佐漂着江南商船郁長發資料　松浦　章　二五〇〇円

■九州大学出版会
九州—その過去・現在・未来〈九州大学公開講座20〉
九州大学公開講座委員会編　一六〇〇円
九州における近代産業の発展　小島恒久編　二八〇〇円
転機に立つ日本水産業〈西日本漁業経済学会三〇周年記念論集〉
西日本漁業経済学会編　五五〇〇円
現代企業の活性化問題　山本　政一　二三〇〇円
弁証法的範疇論への道程—カント・フィヒテ・シェリング—
近藤　良樹　五八〇〇円
市場環境の変化とマーケティング　菊地　通博　二八〇〇円
西日本民俗文化考説　市場直次郎　七〇〇〇円
動作とこころ〈成瀬悟策教授退官記念シンポジアム〉
翔門会編　八五〇〇円
日本における海洋民の総合研究（下巻）
—糸満系漁民を中心として　中楯　興編著　四八〇〇円
生産諸関係論としての経済学の成立　高倉　桑夫　四五〇〇円
中国企業会計の構造と分析　西村　明　四七〇〇円
沖縄の集落景観　坂本　磐雄　七〇〇〇円
日本の大学キャンパス成立史　宮本　雅明　四五〇〇円
ナショナリズムの動態—日本とアジア—
徳本正彦・毛利敏彦・小沼新編　四五〇〇円
医を学ぶ諸君—古川哲二語録集—
古川語録集出版委員会編　一〇〇〇円

第10回（昭和63年度）日本生命財団刊行助成図書

刊行期間　平成元年4月～平成二年3月

●日本生命財団は優れた研究成果でありながら出版の困難な学術専門書を対象に大学出版部協会加盟出版部に刊行助成を行なっている（既刊120点）

Natural History of Social Wasps and Bees in Equatorial Sumatra（赤道スマトラにおける社会性カリバチとハナバチの自然史研究）	大串龍一（金沢大学理学部教授）ほか編著	北海道大学図書刊行会
炭酸塩堆積物の地球化学——生物の生存環境の形成と発展——	北野康（名古屋大学名誉教授）著	東海大学出版会
日本における産地綿織物業の展開	阿部武司（大阪大学経済学部助教授）著	東京大学出版会
Population Ecology of Human Survival（人間生存の個体群生態学）	大塚柳太郎（東京大学医学部助教授）ほか編	東京大学出版会
カラー・解説　日本列島および周辺の重力異常	河野芳輝（金沢大学理学部助教授）著	東京大学出版会
日本蜑人（あま）伝統の研究	田辺悟（横須賀市自然および人文博物館館長）著	法政大学出版局
日本木工技術史の研究	成田壽一郎（大同工業大学教授）著	法政大学出版局
北陸古代の政治と社会	米沢泰（西勝寺住職、富山大学教養部講師）著	法政大学出版局
筋感覚からみた運動制御	伊藤文雄（名古屋大学医学部教授）著	名古屋大学出版会
左嘉城下町竈（かまど）帳	三好不二雄（佐賀大学名誉教授）ほか編	九州大学出版会

大学出版部協会の歩み

昭和38年(一九六三)6月11日　大学出版部協会設立総会、東京大学出版会館にて。玉川大学出版部、中央大学出版部、東海大学出版会、東京大学出版会、東京電機大学出版局、東京農業大学出版会、法政大学出版局、日本学術振興会、日本図書文化協会(東京教育大学)、早稲田大学出版部、以上十校代表者により大学出版部協会設立総会を行なう。大学出版部協会初代幹事長、箕輪成男。

昭和46年(一九七一)11月　関西大学出版部、協会加入。

昭和47年(一九七二)9月　北海道大学図書刊行会、協会加入。

同　年11月　アジア太平洋地域大学出版部会議《国際図書年》を記念して(第一回)東京開催、主催大学出版部協会。

昭和51年(一九七六)5月　国際出版連合(IPA)、京都大会、および国際学術出版連合第二回総会を国立京都国際会議場にて開催。

同　年9月　新幹事長に中平千三郎(東京大学出版会)選出。九州大学出版会、協会加入。

同　年11月　玉川大学出版部・東海大学出版会、国際学術出版連合に加入。

昭和52年(一九七七)12月　東京電機大学出版局、協会再加入。

昭和53年(一九七八)2月　協会、初めて「大学出版部協会総合図書目録」一九七八年度版(合本)を刊行し、共同発送完了。以後年一回定期。

同　年5月　東京大学出版会にて、「協会設立一五周年・回顧と展望」座談会を行なう。

同　年10月　大学出版部協会創立十五周年記念「大学出版図書展示即売会」を紀伊国屋書店PRルームにて開催。

同　年12月　明星大学出版部、協会加入。

昭和54年(一九七九)8月　産業能率大学出版部、協会加入。

昭和55年(一九八〇)7月　日本生命財団第一回出版助成の贈呈式と講演会。大阪・日本生命財団にて行なわれた。12月　慶應通信、協会加入。

昭和56年(一九八一)8月　韓国大学出版部協会訪日団の歓迎レセプション(日本出版クラブ)。

同　年9月　中国にて「日本大学出版物展覧会」を中国図書進出口総公司の主催、大学出版部協会の協賛により開催。

昭和57年(一九八二)9月　「日米大学出版局刊行物展」が、丸善主催、日米両国の大学出版部協会の協賛により丸善本店で開催。名古屋大学出版会、協会加入。

昭和58年(一九八三)5月　大学出版部協会創立二〇周年記念講演会を紀伊国屋ホールにて開催。

昭和60年(一九八五)4月　新幹事長に石井和夫(東京大学出版会)選出。東京理科大学出版会、東京農業大学出版会、協会加入。

同　年8月　中国大学出版部代表団、来日。

昭和61年(一九八六)5月　「大学出版」'86春　創刊。

同　年9月　北京国際図書展へ大学出版部協会訪中代表団、参加。

昭和62年(一九八七)9月　北京・国際外国語教育図書展示会へ大学出版部協会訪中代表団、参加。

昭和63年(一九八八)6月　大学出版部協会創立二五周年記念と感謝の会をアルカディア市ヶ谷(私学会館)で開催。「25年の歩み」刊行。

同　年7月　新幹事長に山田渉(東海大学出版会)選出。

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北８条西８丁目　クラーク会館 TEL.０１１－７４７－２３０８ FAX.011-758-4071
慶應通信	〒108 東京都港区三田２－19－30 TEL.０３－４５１－３５８４ FAX.03-451-3122
産業能率大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル4F TEL.０３－７２４－９１０１ FAX.03-717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園６－１－１ TEL.０４２７－２８－３２１３ FAX.0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－１ TEL.０４２６－７４－２３５１ FAX.0426-74-2354
東海大学出版会	〒160 東京都新宿区新宿３－27－４　新宿東海ビル TEL.０３－３５６－１５４１ FAX. 03-341-1833
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷７－３－１　東京大学構内 TEL.０３－８１１－８８１４ FAX.03-812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町２－２ TEL.０３－２９４－１５５１ FAX.03-294-2807
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘１－１－１ TEL.０３－４２０－２１３１FAX.03-706-8851(総務課)
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL.０３－２６０－４２７１ FAX.03-260-4294
法政大学出版局	〒102 東京都千代田区富士見町２－17－１ TEL.０３－２３７－１７３１ FAX.03-237-8899
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－１－１ TEL.０４２５－９１－５１１５FAX.0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町１－103 TEL.０３－２０３－１５５１ FAX.03-207-0406
名古屋大学出版会	〒464 名古屋市千種区不老町１　名古屋大学構内 TEL.０５２－７８１－５０２７FAX.052-781-0697
関西大学出版部	〒564 吹田市山手町３－３－35 関西大学会館 TEL.０６－３８８－１１２１　FAX.06-330-3718
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎７－１－146 九州大学構内 TEL.０９２－６４１－０５１５FAX.092-641-0172

大学出版（第７号）'89春　平成元年５月１日発行　発行者　大学出版部協会幹事長　山田　渉
〒113 東京都文京区本郷７丁目３番１号東大構内　東京大学出版会内　電話 03-812-2111(内)7954
頒布価格100円（本体98円）〒共

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北８条西８丁目　クラーク会館 TEL.０１１－７４７－２３０８ FAX.011-758-4071
慶應通信	〒108 東京都港区三田２－19－30 TEL.０３－４５１－３５８４ FAX.03-451-3122
産業能率大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル4F TEL.０３－７２４－９１０１ FAX.03-717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園６－１－１ TEL.０４２７－２８－３２１３ FAX.0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－１ TEL.０４２６－７４－２３５１ FAX.0426-74-2354
東海大学出版会	〒160 東京都新宿区新宿３－27－４　新宿東海ビル TEL.０３－３５６－１５４１ FAX. 03-341-1833
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷７－３－１　東京大学構内 TEL.０３－８１１－８８１４ FAX.03-812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町２－２ TEL.０３－２９４－１５５１ FAX.03-294-2807
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘１－１－１ TEL.０３－４２０－２１３１FAX.03-706-8851(総務課)
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL.０３－２６０－４２７１ FAX.03-260-4294
法政大学出版局	〒102 東京都千代田区富士見町２－17－１ TEL.０３－２３７－１７３１ FAX.03-237-8899
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－１－１ TEL.０４２５－９１－５１１５FAX.0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町１－103 TEL.０３－２０３－１５５１ FAX.03-207-0406
名古屋大学出版会	〒464 名古屋市千種区不老町１　名古屋大学構内 TEL.０５２－７８１－５０２７FAX.052-781-0697
関西大学出版部	〒564 吹田市山手町３－３－35 関西大学会館 TEL.０６－３８８－１１２１　FAX.06-330-3718
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎７－１－146 九州大学構内 TEL.０９２－６４１－０５１５FAX.092-641-0172

大学出版(第７号)'89春 平成元年５月１日発行 発行者 大学出版部協会幹事長 山田 渉
〒113 東京都文京区本郷７丁目３番１号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-812-2111(内)7954
頒布価格100円(本体98円)〒共